

3. 未来への提言

冒頭で述べたように、私たちがこの震災で得た教訓は以下のようなものであった。

- ◆大きな災害は、それまでにあった問題をあぶりだす
 - 大きな災害が起きたとき一番被害を受けるのは弱い立場の人々―子ども・女性・高齢者・障害者など―であった
 - 子どもへの虐待、女性への暴力、不登校、貧困など、普段から問題となっていることが噴き出してくる
- ◆災害が起きたときのリスクを少しでも軽減するためには、日ごろからの備えが重要である

災害だけでも大変なのに、二次被害三次被害が広がるのは、やりきれない。これ以上悲しいことを増やしてはならない。そのためには、日ごろの備えが必要だ。

自然の脅威は人間の想像を超えることが必ずある、というのが、今後に備える私たちの大前提である。どんなに科学の粋を尽くしても自然には勝てない、どんなに準備をしてもそれ以上のことが起こりうることを、私たちは体験した。もちろん、物理的な備えは重要であり、怠ってはならない。だからこそ、今回の震災を経て、個人・地域・学校・専門家などが、これまでの防災について考え、次の災害に備えることは必要である。

しかし、ここで留意すべきは人間の心理である。ハザードマップを作ったがためにここまで津波は来ない、とってしまう、防潮堤を作ったがためにこれで津波を防げる、とってしまう、今回の震災では、そのような

思い込みが被害を大きくしてしまうといった事態が各地で起こった。

詐欺被害のニュース報道を見て、「なぜこんなことで騙されるのだろうか」と思うが、事件が後を絶たないということは、それだけ「自分はそうならない」という思い込みが被害者にあるためだろう。実際、チャイルドラインにも、ネット被害、交通事故、誘拐、妊娠など、様々なトラブルにあった子どもたちから電話がかかってくるが、どの子どもも、「自分は大丈夫」と思っていた様子がかがえる。事前に少し考えてくれれば防げることなのに、と思うことも多いが、どんなに教育しても、子どもたちが自分のこととして捉えていない場合は効果がないのである。

では、危機意識を持たせるために、どのような教育をすればよいのだろうか。

「釜石の奇跡」で知られる、群馬大学大学院片田敏孝教授は、①「想定にとらわれるな」②「最善を尽くせ」③「率先避難者になれ」と子どもたちを指導したという。そして、これまでの災害の映像を見せたり、自分たちの町の危険箇所を子どもたちが調査したり、避難訓練を繰り返すというやり方で子どもたちの心と体に浸透させていったという。

今、子どもたちは時間に追われ、バーチャルな世界に親しんでいる。ひとむかし前のように子どもたちが町の中で自由に遊び、時には危ないことや悪いこともして大人に助けられたり叱られたりしながら、駆け回る姿はあまり見られなくなっている。以前は、子どもたちはこのような遊びを通して、周囲の危険な場所を知ることが多かった。今はわざわざ、まち探検とか、マップ作りを授業の一環として行わなければならない。その意味でも、釜石で防災教育に費やされた時間はかなり膨大なものだったと思われる。このことからわかるように、その時だけ効果を発揮するような特効薬はなく、日頃の備えとは、日々の積み重ねでしかない。しかし、この積み重ねが子どもたちだけでなく、周囲の大人をも救ったのだ。

災害弱者を出さないように備えるということ、日々の積み重ねとして

おこなうには、どうしたらよいのか。それは、私たちの周りに常にある人権侵害をなくすことである。子どもへの虐待、女性への暴力、いじめ、貧困など、私たちの周りには、様々な人権問題がある。これらに目をそむけず、常に問題意識を持って学習を重ね、改善に取り組むことが必要だ。

また、人権侵害の被害にあっても、いち早くSOSを発することで、大きな禍になるのを防ぐことができる。そのようなシステムを整備することも必要だ。当事者の声を聞き、気づいたことを少しずつ改善していく努力を怠らないことが強い社会づくりにつながる。

社会全体でこのような努力をすることも重要だが、ひとりひとりが、ひとりでも行動できる強さを持つことが何よりも大切であろう。最近では、子どもも大人も、他人の顔色をうかがいながら生活していることが多い。人間関係に波風を立てないように、余計なトラブルに巻き込まれないように、他人に合わせていく習慣がついている。このような中では、対等な関係のコミュニケーションは成り立ちにくい。そのため、主張しなければならぬときでも主張できなかつたり、断りたい時も断れなかつたりしている。

自己を確立し、自分の信念に従って行動し、他人の意見に柔軟に対応できるような人を育てる必要がある。それは、乳幼児期の土台づくりにかかっている。災害とは一見無関係のようだが、今回の震災のような極限状態で、いかに自分をしっかり保てるかは非常に重要なポイントである。そこで私たちは、未来への提言—1として、このことを強く伝えたいのである。

未来への提言—1 災害に負けない強い土台づくりをしよう

1. 子どもの権利を尊重し、子どもたちが安心して育つ環境をつくろう
 - ・乳幼児期の子育てを大切に考えよう
 - ・子どもを受け入れ、安心した環境で育つための支援をしよう
 - ・子どもの自尊感情を育もう
 - ・子どもが安心して話せる環境をつくろう

- ・子どもが話したいことだけを話すことを保障しよう
 - ・子どもの話を聴く大人を増やそう
 - ・子どもに関わる人材の育成や研修を怠らずに行おう
2. 子どもの遊び・学びを尊重しよう
 - ・子どもは「遊び」を通して学び、「遊び」を通して育つことを理解しよう
 - ・傷ついた子どもの心は「遊び」を通して回復することを知ろう
 - ・子どもたちの遊び場・学習環境を保障しよう
 3. 子どもが自分で考え、判断し、行動することを保障しよう
 - ・子どもが考えている間は待とう
 - ・子どもが判断できるように正しい情報を提供しよう
 - ・子どもの力を信じよう
 - ・子どもは試行錯誤を繰り返して大人になることを理解しよう
 - ・子どもが自らの危険を察知し、回避できる能力を持つような教育を行おう
 - ・必要なときは手を差し伸べよう
 4. ふだんからの人権教育を大切にしよう
 - ・男女、子ども、高齢者、障害のある人、医療を必要とする人、性的マイノリティなど、皆が平等であることを認識し、助け合う社会づくりを行おう
 - ・いじめについて学び合おう
 - ・虐待が及ぼす影響を知り、予防に努めよう
 5. 日頃から行政、NPO などが連携できるシステムを形成しておこう
 6. 地域の文化を大切にしよう、文化の違いを理解し相互理解に努めよう
そのことを子どもにも伝えよう
 7. 日頃から「支える人を支える」体制を確立しよう

8. 日頃から災害の発生について考え、準備しよう
 - ・危険を回避できる避難所づくり、仮設住宅運営を考えておこう
 - ・住民を見守る体制とルールについて、考えておこう
 - ・子どもや災害弱者に関わる人のガイドラインを作成しておこう

また、もし不幸にして災害が起きてしまった時には、未来への提言—2を思い出して実行してほしい。

未来への提言—2 災害が起きたら実行しよう

1. 人権を尊重し、男女、子ども、高齢者、障害のある人、医療を必要とする人、性的マイノリティなど、皆が平等であることを認識し、助け合おう
2. いかなる場合でも暴力をゆるさないために最大限努力しよう
子どもや災害弱者に害を及ぼすことを回避しよう
3. 子どもの居場所、遊び場を避難所や仮設住宅に必ず設置しよう、そこに子どもに寄り添うスタッフを配置しよう
4. 子どもの力も借りて避難生活を乗り切ろう、子どもが活躍できる場をつくろう
5. 子どもたちがふだんの生活をとりもどすために、できるだけの援助をしよう
6. 子どもを含めた被災者の力を信じ、ベースに合わせる支援をしよう
7. 支援者として支援に入るときには次のことに留意しよう
 - ・地域の文化を理解し、尊重する
 - ・現状を把握するために時間をかけて調査する
 - ・様々な立場の人の話をよく聴く

- ・先入観をもたない
 - ・柔軟に対応できる体制で臨む
 - ・十分な資源（人材、ノウハウ、資金）を準備する
 - ・限界を知って行動する
 - ・活動の終息までを見越した計画を立てて実行する
 - ・被災者に無理をさせないよう留意する
8. 自分が、被災者であり支援者である場合には次のことに留意しよう
- ・息長い活動をするために、燃え尽きないように自己管理をする
 - ・ひとりで抱え込まない
 - ・見通しを立てて行動する
 - ・成果が感じられなくてもよしとする
 - ・できれば自分を支えてくれる人を持つ

天災は私たちの想定を超えて襲ってくる。その「想定」をどこまで上げられるか。最善の努力をして、それでもだめなとき、私たちはそれを運命とあきらめるだろう。しかし、備えを怠って起こる災害は、人災である。東日本大震災で起こった様々な人災を検証し、次の災害にはせめて人災がなくなってほしいというのが、私たちの切なる願いである。

南海トラフ地震などの被害想定が発表されても、該当地域の人たちがそれほど真剣に考えていないような気がして、とても心配になる。私たちもそうだった。宮城県沖地震がいつか来ると言われていたが、十分な準備をしていたとは言い難い、しかし、風呂の水は次に新しく入れ替えるまでは捨てないとか、寝るときは必ずやかんに水を汲み置く、食糧は備蓄しておく、懐中電灯やろうそくは用意しておく、などは生活習慣として行っていた。このような些細な行動が、いざという時に生きたという確信はある。

日本は地震国であり、四方を海に囲まれた国である。台風や雪の被害も多い。どんな災害でも、必ず悲しい思いをする人は生まれてしまう。そのような人を一人でも減らすことができるよう、被災地に住む私たちはこれからも発信を続けていこうと思う。